

# 家庭不和、離婚増：家づくりでストップ



地方公務員を退職後、建築設計を学んで転身した。一級建築士の資格を持ち、建築設計事務所を営む。

「住宅は、住む人のもの。住んでみてホッとする家でなければならぬ」と、家族や夫婦のライフスタイルに合わせた理想の空間作りを目指し、設計に臨む。

## 輝く

日本の女性起業家

「ビデオやCDのコレクションの趣味があることを知らなければ、収納スペースを考えないで設計してしまう」。そこで、個人の趣味や税金対策といった資金相談を受けながら、十年先

アーキテクト社長

## 種谷 奈雄子さん

はどんな風に暮らしたいかといった将来設計も視野に入れ、顧客との入念な打ち合わせを繰り返すという。

「家づくりでは、万人にちょうど良い『普通』はない」が持論。明るさの好み、ほこりの許容量など、目に見えないストレスが、住み心地の善しあしにつながっていくと考え、キッチンやトイレ、床や壁の材料ひとつでも、その人にとっての「心地よさ」を推測して設計する。

「住まいは家族関係や人間の人格形成に大きな影響力がある」とし、親子、夫婦がそのときどきにあった距離感を保つことが重要と説く。

若い夫婦には、子供に話せないような会話もある。夫婦のコミュニケーションをとるための寝室は別に設置し、子供部屋はリビングを通していくように作る。熟年夫婦には、お互いの「気配」を感じ、思いやりなが

ら自立できる空間が大事。趣味の部屋を別に作る空間を配置するなど、住まいの間取りによって家族の対話不足を克服できるように設計。離婚しない家づくりの力を注ぐ。

昨年、暮らし方から住まいを考える「私を変えよう・ライフデザイン」をテーマに、女性五人によるネットワーク組織「リ・ライフデザイン・ネット」も立ち上げた。リフォーム相談やセミナーの開催、シニアが生き生き過ごすための調査・研究を行うNPO（民間非営利団体）法人「シニアテック」の理事も務める種谷さん。建築の経験を生かした活動も幅広く手がけていく方針だ。

◇ 次回は、不動産競売事業や中古住宅再生事業に力を入れる不動産会社、マイホームの桐山早苗さん登場します。

（写真・文 田畑則子）

《たねや・なおこ》慶大経卒。地方公務員を退職して職業技術専門学校で建築設計を学ぶ。建築設計事務所勤務などを経て89年独立、98年アーキテクト設立。46歳。東京都出身。